

# ふれあい

2011年 夏季号 vol.43

2011年(平成23年)8月20日発行

病院  
理念

脳神経外科専門病院として私達は患者の皆様にも、より高度の医療技術を提供し、公平で平等な患者中心の医療を行います。

## 患者さんコーナー



金沢市 竹村 外喜夫 様

冠省  
旧蠟「ふれあい」戴き有難うござい  
ました。MD法手術を受け投稿いた  
します。

「激痛から快痛に」

今年六月で八十三歳になります。三  
年前の平成二十年三月佐藤院長先  
生のMD法手術を受け腰痛が地獄  
から快楽に返った程に喜んでおり  
ます。お礼・感謝は筆舌に尽くせま  
せん。

手術前約十ヶ月、横になっても立っ  
ても激痛でした。この痛みは痼通  
（死ぬまで直らない痛み）と諦めて  
おりました。痛さを言葉で表せない  
し、誰に相談しても無駄と思う反  
面、死にたくないし、この後何年続  
くかと思うと自暴自棄にもなりま  
した。

そんな状態の時のMD法でした。藁  
にもすがる思いでしたが、なんと入  
院十日余りで退院でき、手術の翌日  
食事はできるし歩けるといいうこと  
に驚きました。かつて何回か手術し  
ましたが、三日間動いてはいけな  
い、オナラのでるまで水もとって  
いけないと術後の苦痛を知って  
おるだけに。

人は思かです「病癒ゆればその病な  
る時を忘る」といわれて自戒して  
おります。  
今の私は少しばかり自家菜園をし  
ておりオーバーワークになると腰  
が痛みますが  
休むと快痛で  
す。有難うござ  
いました。



## 医療モデルから社会モデルのチームへ



副院長・リハビリセンター長  
山口 昌夫

「強い団結力と試合毎に変化した  
ことが勝利に結びついた」と、世界  
一になったなでしこジャパンの選  
手たちは語りました。サッカーの目  
的はゴールにボールを入れること  
であり、単純明快です。患者さんの  
ために働く我々医療・福祉のチーム  
の目的（ゴール）はなんでしょうか。  
患者さんの生活を元に復すること  
であり、患者さんが地域でその人ら  
しく生きることです。即ちリハビリ  
テーションの理念（目的）です。サッ  
カーのように具体的単純ではなく、  
抽象的多様な目的であるが故に、  
チームメンバーは多種多方面に亘  
り、そのための手段は急性期医療に  
始まり、看護、リハビリ医療、心理的  
支援、介護、社会資源（制度）、地域ケ  
ア、道具、環境（住宅、町、都市、人、文  
化）、教育、職業訓練など、あらゆる  
サービスに及びます。

敵がいるとはいえず、サッカーの  
チームワークの猛練習を考えれば、  
医療・福祉のチームワークにも練習  
があつてしかるべきではないで  
しょうか。チームワークは意識的活  
動であり、専門家の顔（医師、看護  
師、理学療法士など専門職の面々）  
を捨て、チーム内の役割を分かっ  
て、互いに本音の意見を闘わせる土

壤に開花します。討論しないチーム  
は役に立たないし、利用者のために  
討論せざるを得ないのがチームで  
す。一人一人では成果に結びつか  
ないこと、互いの能力と限界を知るこ  
とに始まり、知恵と力を集める結東  
力を培わなければなりません。一方  
で、チームが置かれていた環境と利  
用者に合わせて変化している行動技術  
の柔軟性を養わなければなりません。  
当院では、急性期医療における医  
療モデルのチームを経て、リハビリ  
テーションの多様なニーズに  
社会モデルのチームを目指して  
おり、その結束力と柔軟性をさらに  
高めたいと思っています。

## 新着情報



全国では6台め、メアが当  
ては初となるO-armが導入  
され、これまでメアによる透  
視撮影に加え、断層CTのよ  
うに多彩な画像を撮影する  
ことができます。このように  
多彩な画像を用いること  
により、現在当院が行って  
いる脊椎の固定手術がより  
正確かつ安全に行うことが  
できます。詳細は次号で。

このように多彩な画像を用いることにより、現在当院が行っている脊椎の固定手術がより正確かつ安全に行うことができます。詳細は次号で。

## 病気を診るのではなく、 “人”を診る

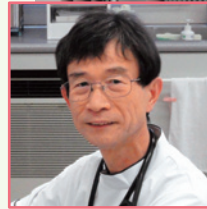
白山石川医療企業団  
吉野谷診療所



診療所の所長である橋本宏樹先生は、一風変わった経歴の持ち主で、京都大学工学部を卒業後、一旦は県外の一般企業に就職されましたが、故郷である吉野谷村で「地域に根ざした医療をやりたい」との思いから、30歳で医学の道を目指し

当院から白山麓へ続く国道を手取川に沿って40分、緑あふれる山々に囲まれた白山市吉野(旧吉野谷村)に、今回ご紹介する「吉野谷診療所」があります。

ました。医師となつてから4年間、大  
学病院で医療の基礎を学ばれた後、  
最初の赴任先に選んだのが、故郷の  
吉野谷診療所。以来、今年で赴任20年  
目、その間ずっと、「長年この地域で生  
活をして、がんばってきた方々が安  
心して暮らせる。そして安心して人  
生の最期を迎えられるように。」とい  
う思いを胸に、奮闘されてきました。  
過疎化が進む白山麓の旧5村、診  
療所にやってくる患者さんの平均年  
齢も80歳と高齢で、疾患も多岐に渡  
ります。先生のご専門は内科ですが、  
高齢の患者さんには足腰に痛みを抱  
える方も多く、患部を温める治療機  
器や牽引装置を導入したりなど、ま  
さに地域の“かかりつけ医”として、  
手術、出産以外は何でも診ているそ  
うです。



所長：橋本 宏樹先生

### DATA

白山石川医療企業団 吉野谷診療所

#### 住所

石川県白山市佐良二124番地

職員数 / 7名：常勤医師 1、非常勤医師 1、  
看護師 2(ケアマネ資格有)、事務 3

#### TEL

076-255-5019

#### MAIL

hayoshic@po.incl.ne.jp

#### URL

<http://www.tsurugihp.jp/yosinodani/index.html>



「病気を診るのではなく、“人”を診てほしい。その人の生活や人生を見て、なぜこういう病気になったのかを学んでほしい。」研修医の実習を多く受け入れている先生は、若い医師たちへこう言います。

先生が赴任以来力を注いでおられるのが、患者さんの自宅まで伺う「訪問診療」です。今回特別に同行させてもらった私たちが見たものは、笑顔で話される先生と患者さんの姿でした。確かな信頼関係が築かれているのが伝わってきました。

24時間365日往診に対応する在宅療養支援診療所の指定のハードルは決して低いものではなく、この制度ができる前から同等の対応をしていたので、



それほど苦労はしていません。でもお酒は飲まなくなりましたね。」と笑いながら先生はこともなげにおっしゃいます。赴任以来、学会以外で県外に出たことはないそうです。

「一人の患者さんを最期まで見守る。それが地域医療のあり方であり、それは決して高度先端医療に引けをとるものではない。大げさかもしれないが、これが自分の使命である。他の先生方があまりやらないことをすることに、自分の存在意義があるんじゃないかな。」と最後に先生はそう締めくくられました。

(文責：川腰)

院長：橋本 宏樹 先生  
経歴：昭和51年 京都大学工学部卒業  
昭和63年 金沢大学医学部卒業  
昭和63年 金沢大学第一内科入局  
平成4年 吉野谷村国民健康保険診療所(現、吉野谷診療所)



シリーズ  
**脊椎最前線**  
番外編

「日経実力病院調査」腰痛編に  
当院が掲載

広報企画室

4月7日の日本経済新聞の「日経実力病院調査」腰痛編に当院が掲載されました。近年の腰椎疾患の手術は切開が少なく入院期間も短い「患者さんに負担の少ない手術」が主流になりつつあります。当院では2004年11月よりMD法(Microscopic Decotomy)による腰椎椎間板ヘルニアや脊柱管狭窄症の最小侵襲手術に取り組んできました。これまでの手術件数は2000件を超え、北陸では第2位、石川県内では第1位となりました。

病院名	所在地	診療実績				過程 医療機能 評価 (点)	構造 (内視鏡 切除 摘出術)		
		DPCデータの 脊柱管狭窄症 (例)		DPCデータの 椎間板ヘルニア (例)					
		手術 あり	手術 なし	手術 あり	手術 なし				
龜田第一病院	新潟	169	10	193	38	17	47	○	
新潟中央病院	新潟	143	-	25	138	73	13	65	○
新潟市民病院	新潟	122	-	27	37	12	-	72	○
長岡中央総合病院	新潟	85	-	19	*43	-	-	-	○
高岡総合病院	富山	*224	-	262	197	95	96	79	○
金沢脳神経外科病院	石川	92	-	-	61	-	-	66	○
静岡済生会総合病院	静岡	87	-	125	*34	-	50	68	○
聖隷浜松病院	静岡	*83	-	19	*41	-	-	78	○
藤枝平成記念病院	静岡	83	-	93	*51	-	27	-	○
遠藤三方原病院	静岡	82	-	20	*24	-	-	73	○
中部労災病院	愛知	164	-	85	65	-	90	74	○
藤田保健衛生大病院	愛知	106	-	104	*35	-	19	73	○
名城病院	愛知	99	-	215	*20	-	49	72	○
名古屋第二赤十字病院	愛知	85	-	*292	*23	-	35	75	○
愛知医大病院	愛知	83	-	54	*29	-	12	71	○

日本経済新聞 2011年4月7日(26面)  
「日経実力病院調査 腰痛編」より抜粋

当院の治療実績



私たちが派遣された時には地震発生から2ヶ月が経過しており市街地の生活・ライフラインはほぼ平常どおり機能していました。市中の医療機関についても、多くの通常の診療を再開していました。

3月11日に、東北地方太平洋沖を震源とする大規模な地震が東日本を襲いました。日本医師会では、1年前の22年3月に大規模災害に備えて災害医療チーム(JMAT)の必要性が提唱され、各都道府県の医師会も体制整備を求められていたこともあって、地震発生から1週間後には第一班が被災地である福島県に派遣されました。当院でも県医師会の要請を受け、5月12日から5月17日の間、福島県相馬市に医療チームを派遣することになりました。チームメンバーは、加藤医師、銭谷看護師、山根看護師、酒谷事務員の4名です。私たちの現地での主な活動は、市内3ヶ所の避難所を巡回し、医療を必要とする方に適切な医療を提供することです。全国から、医療チームをはじめ、保健師チーム、心のケアチーム、薬剤師チームなど多数の医療スタッフが入っており、相馬市保健センターを拠点に合同ミーティングを通じ市の災害対策本部や患者さんについての情報を共有し協力して活動しました。

TOPIC

日本医師会災害医療チーム  
(JMAT)に参加して

事務部 酒谷一成

都合等で避難所内の臨時診療所や巡回するJMATに診療を求めるとして後を絶たない状況でした。特に、上気道炎や不眠、高血圧の患者さんが多く診察に來られました。



5月の時点で相馬市内には8つの避難所に約900名が避難中でしたが、仕事や学校に避難所から通う方も多く、その大半は太平洋(松川浦)沿岸の住人で津波により家や車、船舶、職場などを失い、中には家族を失くされた方もいらっしゃいます。これに加えて避難所生活が長期化しており、今後精神面でのフォローと仮設住宅への入居後の経済面など生活に対する支援が重要だと思いました。

今回の震災については、報道により大きな被害を受けたことは分かっていたつもりでしたが、実際に現地で見渡したとき、その瓦礫の中に立ち周囲を見渡したとき、そのあまりの無惨な光景に言葉もなく大きな衝撃に襲われました。被災者の方々の心労、苦悩は計り知れません。相馬市のみならず被害を受けた多くの方々、地域に対し、医療者として私たちにできる支援を継続し、1日も早い復興と被災者の方々の健康を祈らずにはいられません。

## 理学療法士による取り組み

リハビリセンター 理学療法士 江森 章

現在、当院では回復期リハビリテーション病棟2病棟に対して16名の理学療法士が集中的なリハビリテーションを行っています。理学療法では、寝返りや起き上がり、立ち上がりなどの起居動作から、病棟でのトイレや食堂への移動まで活動の場を徐々に拡げていくことを目指しています。理学療法室を中心として行う機能訓練では、筋力・バランス能力・持久力などの向上を図ります。身体機能の向上によりできるようなった動作を実際の病棟での日常生活に結びつけられるよう、杖・歩行器などの歩行手段やトイレ・食堂などの環境設定を検討し、安全性も考慮しながら、可能な限りの自立を目指していきます。作業療法士や看護師などとセーフティーカンファレン



スを行い、転倒・転落事故が発生しないように取り組んでいます。ご家族に対しては、退院後の生活を想定した介護の方法をお伝えし、患者さんには自主練習の指導を行います。また、入棟されてから比較的早期に家屋評価を行い、住宅改修に際しての提案を作業療法士と共にしたりして、安心して社会復帰ができるようサポートしています。休日には交代で理学療法士が病棟でのリハビリテーションを行っており、廃用(寝たきり状態など過度の安静状態を取り続けること)により起こる身体機能の低下による機能の低下を防ぎ、出来る限り患者さんの能力が維持・向上できるようにと努めています。今後とも患者さんが安心して退院後の生活が送れるような質・量ともに充実したリハビリテーションが提供できるよう取り組んでいきたいと考えています。



## 部署探訪

### 2 医療福祉相談室

病気やけがをきっかけに様々な問題や心配事が起こってくると思います。経済的な不安、退院後の生活や介護への不安、各種社会保障制度の利用についてなど、「どうすればよいかわからない」、「どこへ聞いたらよいかわからない」、「そんなとき、当院では「医療福祉相談室」がご相談に応じます。

医療福祉相談室は、室長に山口副院長、副室長に宮腰看護師長、社会福祉業務の専門資格である社会福祉士を有する医療ソーシャルワーカーとして山下、永田、渡邊、中田、藤田の7名で構成されています。主な業務内容は、介護保険や身

体障害者手帳など社会保障制度活用のための援助、他の医療機関から当院の回復期リハビリテーション病棟や医療療養病棟に転院する際の調整、在宅復帰、転院、施設入所など退院に向けての院内外の関係職種や地域の関係機関との調整などです。患者さんと、患者さんを取り巻くあらゆるものつなげを結びつける「架け橋」として、入院から退院までをサポートいたします。



学会

## 第14回日本病院脳神経外科学会

7月16・17日に愛媛県松山市で第14回日本病院脳神経外科学会が開催されました。当院からは、佐藤病院長、土山リハビリセンター技士長、岡野看護部主任の3名が参加しました。演題の共通したテーマは「腰椎疾患の周術期管理」で、佐藤病院長は「腰椎変性疾患に対する最小侵襲手術と病態に基づく周術期管理」、土山リハビリセンター技士長は「腰椎変性疾患の周術期管理」とリハビリテーション、岡野

看護部主任は「腰椎変性疾患患者の周術期管理」について、それぞれの職種の立場から発表しました。

